火山噴火予知連絡会第８回富士山ワーキンググループ議事録

日　時：平成15年3月24日(月)　16時00分～18時15分
場　所：気象庁防災会議室
出席者：会長：井田
　　委員：藤井(敏)、渡辺、鍵山、石原、村上、鵜川、山本、濱田
　臨時委員：荒牧、宮地、西宮
　　事務局：小宮、宇平、山里、長谷川、林、瀉山
　オブザーバ：山本、藤原、高木

富士山ワーキンググループ報告書案について

報告書案の説明

報告書の体裁については、概要1ページ、論文集、別冊で構成する案とした。論文集は、これまでの会合で検討した事項を8章に分けて記し、概要を加えるという構成、別冊は、前回会合の資料のうち富士山に類似した火山の収集資料である。(事務局)

≪議論≫

(報告書の体裁について)

・論文集は、報告集という名称に変えたほうがよい。
・1ページの概要は位置付けが明確ではない。
・報告集の最初の章にこの内容を含めて、2～3 ページの報告書概要にするほうがよい。また、その概要のはじめには、検討の経緯を記したほうがよい。
・報告集の各章は、個別に用いられることもあるだろうから、各章の題が富士山に関するものだとわかるように修正してほしい。
・火山噴火予知連絡会には、報告集と別冊により富士山ワーキンググループの報告として、このうち版権の問題がある別冊の部分を除いて、火山噴火予知連絡会会報に掲載する方針とする。その他の方法による報告書の配布については、事務局で検討していただくことで、いかがか。　→　了解。

(報告集の各章の内容について)

・報告書の中で、観測のあり方を検討したと記さない理由は？
・観測研究のあり方については、すでに科学技術・学術審議会測地学分科会火山部会からの報告がなされており、富士山ワーキンググループで検討したのは監視観測のあり方であると、前回の会合で指摘があった。このことを踏まえて、立場を明確に示す報告書案とした。
・富士山の宝永噴火の過去の活動について検討したことについて、「シナリオ」に代えて「プロセスの推定」という言葉を使った方が適切だろう。
・宝永噴火のダイクモデルは、作業仮説として作ったものであることを明示するべきである。
・情報発表のタイミングについては、整理したというよりは、検討したと表現する方が適切であろう。
・概要のうち、監視観測のあり方を検討する手順を説明する部分では、まず、平常時の活動の監視の考え方から記述をし、そのあとで、噴火に先立つ現象を捉える考え方を示す方がわかりやすい。
・シミュレーションによる検知能力調査では、山頂の南西側で震源決定の誤差が大きくなる傾向があるが、山頂から遠い部分では、火山周辺以外の遠くの観測点の観測結果を使えるので、シミュレーションで現状を表現できないと思われる。山頂から遠い場所については、震源決定の誤差を図示しない方がよいだろう。

・地殻変動については、検知が可能というのはあいまいな表現なので、変動源が推定できるなどの分かりやすい表現に改めた方がよい。
・GPS と傾斜計のそれぞれの利点を生かしてというまとめ方は、専門家でなければそれぞれの利点がどのようなものかを理解できないので、説明不足である。
・富士山に類似した火山の資料収集の章については、エトナ火山やマウナロア火山でどのような噴火前兆現象の観測実績があったかを加えて、まとめる。
・防災関係者の中には、「富士山では、噴火前に多分、緊急火山情報が発表される」などという誤解というか幻想を描いている者が多い。また、その誤解のもとで、防災計画を考えようとしていないか心配である。
・表の考え方に沿って火山情報を発表すれば、現象の推移によっては、噴火前に臨時火山情報が、あるいは、臨時火山情報・緊急火山情報の順で情報を発表できる場合があるということ示し、指摘があったような防災関係者の誤解を解く必要があるだろう。
・報告書は、本日の議論を踏まえてメールにより修正点を確認し、3 月末までに確定する。会合は、今回を最後とする。